

黒曜石を用いた世界観の物質化 —テオティワカンの埋葬墓における型式分類と空間分析より—

愛知県立大学大学院
国際文化研究科 博士後期課程
千葉裕太
(ちば ゆうた)

はじめに

古代メソアメリカにおいて、黒曜石は利器製作の主要石材であるとともに、権力や神々の象徴として、世俗性と神聖性の二面性を持っていた(千葉 2014)。テオティワカンにおいては、卓越した加工技術を持って、ユニークな黒曜石製の「羽毛の生えた蛇」の意匠を創り出している。これまでの黒曜石研究では、利器としての黒曜石の用途や形状、あるいは石材の産地同定が主たるテーマとなっていた(Gaxiola G. and Clark (ed.) 1989)。しかしながら、テオティワカンの埋葬墓から出土した黒曜石は、副葬品として明らかに儀礼のコンテクストに関係している。またテオティワカンは、その都市景観そのものが当時の宇宙観を表現した計画都市である。その主要モニュメントの一つである「月のピラミッド」内部に設営された埋葬墓に関しても、副葬品それぞれの遺物レベルや、これらの複合的な位置関係に、世界観が表れていると考えられる。中でも黒曜石製品はその形状から、配置時に意図した方位や個数の確認に適した研究材料であるといえる。本報告では黒曜石の儀礼的側面に注目したい。

研究方法と研究対象

テオティワカンにおける黒曜石の儀礼的側面を理解するために、埋葬墓から発見された黒曜石の型式分類と空間分析を試みた。本発表ではその一例として月のピラミッドの埋葬墓 5 に付随する黒曜石を例としてあげる。なお、空間分析に関しては、ESRI 社の ArcGIS 9.3 を利用した。

埋葬墓 5 は、A.D.300 年頃に建設された第 5 期ピラミッドに頂上部に位置する(表 1)。しかしながらその埋め土は第 6 期ピラミッドの土と境が見られないことから、第 5 期ピラミッドの放棄と第 6 期ピラミッド建造の間に埋葬されたものと考えられる。空間的には、埋葬墓 5 は第 5 期ピラミッド頂上部の北側中央部に位置し、また第 6 期ピラミッド南側中央部の直下に位置している(図 1)。埋葬墓 5 からは 3 体の人間体と石器、土器、繊維体、骨など、多くの異なる材質の副葬品が発見されている。中でも黒曜石は点数として最も多い副葬品の一つであり、その形状から方向性を持たせることができるため、空間分析に非常

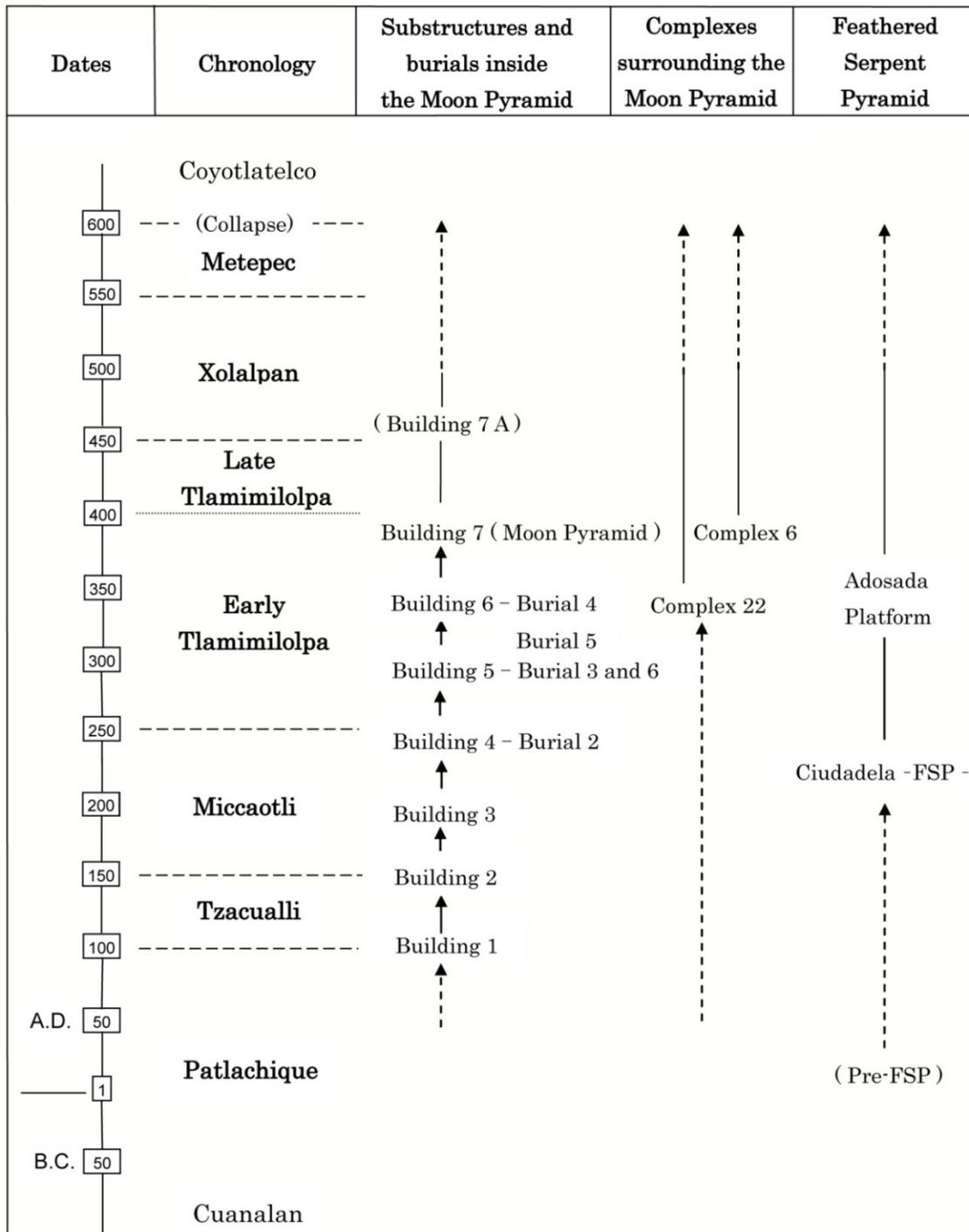


表 1 テオティワカンの編年 (Sugiyama and Cabrera 2007 を基に Sugiyama and Cabrera 2001、2002 のデータを統合)

に適した資料である。空間分析を行うにあたっては黒曜石そのものがもつ方向性ととも、他の重要な資料である 2 体の埋葬体、貝、緑石製人形との関連性に特に着目した。同時に、ミニチュア製品が多い同墓内の黒曜石製品の中で唯一サイズが大きい黒曜石製人形についても、他の黒曜石製品との関連性を試案した。

空間分析

空間分析を行う上で非常に重要な役割を持つのがテオティワカンの方向軸である。テオティワカンでは、地域の北に位置するセロ・ゴルドから死者の大通りに突き抜ける直線を南北の軸とする独自の方位軸を持つ。天体の方位軸からは 15.30° 東に傾いており、この独自の方位軸を持って都市設計がなされたことはよく知られている(図 2)(以下、テオティワカン独自の方位軸を「建築軸」と表記する)。埋葬墓 5 から発見された 3 体の生贄体もまた、正確にこの建築軸の西方向を向いて座らされている。埋葬墓 5 内東側に置かれたほら貝もまた、正確に口が西向きになるように設置されている。

建築軸とともに、天体の方位も重要であることも黒曜石製品の空間分析からわかる(図 3)。埋葬墓 5 から発見された緑色石製人形は、天体の西方を向いて配置されている。また、同墓内からは一つだけ大型の黒曜石製人形が発見されている。この人形は、足を天体の西方に向けて配置されている。建築と天体の方位軸を、それぞれほら貝と黒曜石製人形を通るように置くと、二つの方位軸の交点に埋葬体 5A が座している。他の埋葬体との装飾品の比較や、緑石製の人形を正確に背後に配置していること、正面にワシの生贄体を伴うことから、埋葬体 5A の座位置が埋葬墓 5 の中心であると言える。

次に黒曜石自体に目を向ける。報告者は、現在アリゾナ州立大学テオティワカン考古学研究センターに保管されている黒曜石製品の内、テオティワカンの「月のピラミッド」、「太陽のピラミッド」、「羽毛の生えた蛇神殿」の埋葬墓から出土した全 1857 点の黒曜石製品を肉眼分析した。型式分類においては 12 種類(大型 6 種、ミニチュア 6 種)に分類した(表 2)。

大型製品		ミニチュア製品	
無	ナイフ		ナイフ
	人型エキセントリック石器		人型エキセントリック石器
無	蛇形エキセントリック石器		蛇形エキセントリック石器
無	カーブ・ナイフ	無	カーブ・ナイフ
	石鏃		石鏃
	石刃	無	石刃

表 2. 黒曜石製品の型式分類

なお、このうちの 5 つの型式に関しては月のピラミッドの埋葬墓 5 からは発見されていない。型式ごとに黒曜石製品の配置をみていくと、石刃と石鏃は、それぞれに独自のルールに従い配置されている。一方、ミニチュア製品群は、別の規則に則って配置されているように見受けられる。

石鏃に関しては、その方向から 4 つのグループに分けることができる(図 4)。それぞれのグループにおける個体数は、表のとおりである。なお、グループ B に関しては平面上は 5

点の鎌が確認できる。しかし、Arc GIS を用いて埋葬墓を三次元に復元すると、その内一点は、明らかに他の製品と標高値が異なる。半分近くが破損しており、破片も周辺から確認できていないことから、埋土に紛れたものと推測できるため、グループ B の点数は 4 点と推定できる。9、4、13、52 の数字は、メソアメリカの聖数である(Sugiyama 2005)。メソアメリカの宇宙観では、世界は、9 層の地下界、4 方位に広がる地上界、13 層の天上界で構成されている(Nicholson 1959)。また、365 日の太陽暦のある一日と、260 日の宗教暦のある一日が再び同じ組み合わせとなるには、太陽暦で 52 年かかる(Kubler and Gibson 1951)(図 5)。メソアメリカでは 52 年毎に「新しい火の祝祭」を行っていたことはよく知られている。つまり、時空間の認識と関連する聖数に則って、その個数の石鎌を一つのまとまりとするように配置した可能性がある。

ミニチュア製品に関しては、意図的に人型エキセントリック石器、蛇型エキセントリック石器、ナイフの 3 つを 1 セットとして配置している(図 6)。なお、ナイフについては刃部の長い石鎌で代用するケースも見られる。

この黒曜石製の蛇が「羽毛の生えた蛇神」を模したものであることは明らかである(図 7)。アステカの神話において、ナナワツィンの太陽とテクシステカトルの月が天上で静止していた時、神々はケツァルコアトルを呼び、自らの心臓を彼にくりぬかせたと言う。これにより、太陽と月は運行を開始し、人々は安定した生活を開始することが可能になった。上記の 3 点は、テオティワカン人が同じような宗教観を持っていた可能性を示唆するものであろう。

この「羽毛の生えた蛇」の意匠は、テオティワカンの月のピラミッド及び羽毛の生えた蛇神殿以外からは発見されていない。羽毛の生えた蛇が同じく権力の象徴である冠を運ぶ図像も発見されており、羽毛の生えた蛇自体もまた、時空間を支配する権力の象徴である(図 8)。この意匠が埋葬墓 5 に用いられていることは、非常にシンボリックな意味合いを持つと考えられる。というのも、埋葬墓 5 は他の埋葬墓とは異なる特徴を有しているからである。

まず、埋葬墓 5 から発見された 3 体の埋葬体の手の位置である。これまで発見された多くの埋葬墓において、埋葬体は生贄体であり、両手首を後ろ手に縛られていた(Sugiyama, Cabrera y Lujan 2004, Sugiyama y Lujan 2006)。一方で埋葬墓 5 から発見された 3 体は手を身体の前方に自然に垂らしており(埋葬体 5C のみ手の位置は異なる)、手の自由が利いたことはすでに明らかにされている。つまり、彼らは単なる生贄ではなく、重要な神への捧げものだったのである。また、本発表の冒頭でも述べたが、埋葬墓 5 はその出土時の埋め土から、第 5 期ピラミッドを放棄し第 6 期ピラミッドに改築する時期に相当すると考えられる。言い換えるならば、新しいモニュメントを創始する時期であり、第 5 期ピラミッドの封鎖儀礼、または第 6 期ピラミッド建造の記念儀礼として、埋葬墓 5 が設置された可能性が示唆される。

加えて、黒曜石製品の色に関して、埋葬墓 5 における黒曜石製品のうち現在アリゾナ州

立大学テオティワカン考古学研究センターにある全 419 点を分析した。比重で見ると、全 1430.65g の黒曜石総量に対し、1052.08g(73.5%)が灰色黒曜石であり、378.57g(26.5%)が緑色黒曜石であった。しかしながら 419 点の製品のうち 315 点が緑色黒曜石であり、個体数においては 75.2%が緑色黒曜石であったことがわかった。灰色黒曜石は主に大型の石鏃を作成するために使用された(図 9)。ミニチュア製品は緑色黒曜石製が大半である。埋葬墓 5 では、灰色黒曜石製のミニチュア製品は 8 点のみである。

このデータのみからは、従来言われているような、黒曜石の色の使い分けの象徴的な意味を見出すには不十分である。むしろ、技術的な理由のほうが説明として妥当である。なぜなら、ミニチュア製品の大半は石刃を再加工して作られているおり、石刃を短時間に大量生産するには組成の均質なパチューカ産緑色黒曜石のほうが適しているからである。しかしながら従来から議論されているような黒曜石の色のシンボリックな意味を否定するにもデータとして不十分であるから、他の埋葬墓で同様の空間分析を行う必要がある。

石刃とミニチュア製品に注目して、他の埋葬墓についても見てみたい。報告者は月のピラミッドから発見された埋葬墓 2、3、5、6 から出土した黒曜石製の石刃とミニチュア製品について、同研究センターにある全 1410 点を分析した。埋葬墓 2、6 から出土した石刃とミニチュア製品は、主として灰色黒曜石で作られている。対称的に、埋葬墓 3、5 及び埋葬墓 5 の埋土から発見されたものは、圧倒的に緑色黒曜石で製作されている(埋葬墓 3: 276/351 点、埋葬墓 5: 304/314 点)。このデータから、石刃製作はいつの時期でも緑色黒曜石を選択する傾向があったわけではないことがわかり、時期とともに緑色黒曜石製石刃が増加するという kabata (2003、2012)のデータと一致する。特に、第 5 期ピラミッドから、第 6 期ピラミッドへの移行期に増加が顕著である。埋葬墓 3 は、第 5 期ピラミッド、埋葬墓 5 は、第 6 期ピラミッドと時期が重なる。そして、埋葬墓 2 では、多くの製品タイプが緑色黒曜石を用いて製作されている。このことから、第 5 期ピラミッドが建設された後、埋葬墓 5 が建設される以前に、緑色黒曜石を石刃製作に使用する選好が高まったと考えられる。

まとめ

黒曜石の空間分析からは次の 3 つのことがわかった：

- 1) 一部の黒曜石製品は、建築軸や天体の方位軸を意識して配置されている。
- 2) 黒曜石製品は、タイプごとのルールに従って配置された。
- 3) いくつかのタイプは象徴的な意味合いを持ち、それは製品の位置や個体数、形状、あるいは遺物群という形で表されている。

一部の黒曜石製品が埋葬墓内で方向性を意図して配置されていることは明らかであり、その方位はテオティワカンの都市計画と共通して、建築軸や天体の方位軸を基にしている。同時に、埋葬体や他の副葬品との関連を意図していることも見受けられ、埋葬墓内の副葬品のうちどれが特に重要な意味合いを持つか明らかにすることが、空間分析では必要なことがわかった。埋葬墓 5 に関しては黒曜石製品は彼らにとっての時間や空間の認識と関連

付けて配置されていた。埋葬墓 5 の設置はおそらく、「月のピラミッド」改築計画を記念するセレモニーの一部として執り行われたのであろう。その中で黒曜石製品は、当時のテオティワカンの時空間の認識を物質化する舞台装置としての役割を担っていたと結論付ける。

今後の課題

このように、黒曜石製品の空間分析は、黒曜石製品とシンボリズムやモニュメンタリティとの関係性、ひいては黒曜石製品が所在する埋葬墓の意味合いの理解に有益となる。3次元で分布を捉えることは、1つの埋葬墓内における分析であっても有効である。テオティワカン人による黒曜石製品の象徴利用を理解するための1つの手法になり得るだろう。

今後の課題として、埋葬墓 5 の空間分析においては、立体的に観察したとき、いくつかの異なる層位を形成するように供物が配されていることも確認された。埋葬墓に属する遺物か埋土の混入物か改めて見直す必要がある。すなわち、今後さらに空間分析を行うにあたっては3次元での観察が必要である。また、埋葬墓内の製品の個体数の意味合いや、平面・空間における配置のパターンについてはより深く研究をする必要がある。そのために、他の埋葬墓についても、特に同じ月のピラミッド出土のものあるいは同時期の他の建造物で埋葬されたものについて同様の空間分析を行い、比較検討することが今後の研究の課題である。そしてその際には、製品を配置する方向やその個体数、配置パターン、3タイプを1セットととする製品群(人型エキセントリック石器、蛇型エキセントリック石器、ナイフ)が、分析の際の注意点となる。

参考文献

Kabata, Shigeru

2003 *Transformación política y económica en Teotihuacán: desde el punto de vista del análisis de obsidiana*. Tesis de maestría. Aichi Prefectural University, Nagakute.

2012 El desarrollo de Teotihuacan y la obsidiana: Hallazgos y resultados de los análisis del Proyecto Pirámide de la Luna. *Journal of Cultural Symbiosis Research* 6: 208-229.

Kubler, George, and Charles Gibson

1951 *The Tovar Calendar*. *Memoirs of the Connecticut Academy of Arts and Sciences*, vol. 11. New Haven.

Millon, René

1973 *Urbanization at Teotihuacan, México, Vol. 1, part 1: The Teotihuacan Map: Text*. University of Texas Press, Austin.

Nicholson, Irene

1959 *Firefly in the night: a study of ancient Mexican poetry and symbolism*,
Illustrated by Abel Mendoza, Faber and Faber, London.

Sugiyama, Saburo

2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan*. Cambridge University Press, Cambridge.

Sugiyama, Saburo, and Rubén Cabrera Castro

2001 *Informe de la Tercera Temporada 2000, del Proyecto Pirámide de la Luna y Proyecto de Investigación en la Pirámide de la Luna, Teotihuacan: Carta Temporada de Excavación 2001*. Archivo del Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

2002 *Informe de la Cuarta Temporada 2001, del Proyecto Pirámide de la Luna y Proyecto de Investigación en la Pirámide de la Luna, Teotihuacan: Quinta Temporada de Excavación 2002*. Archivo del Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

2007 The Moon Pyramid Project and the Teotihuacan State Polity: A Brief Summary of the 1998-2004 Excavations. *Ancient Mesoamerica* 18: 109-125.

Sugiyama, Saburo y Leonardo López Luján

2006 Simbolismo y función de los entierros dedicatorios de la Pirámide de la Luna en teotihuacan. *Arqueología e historia del centro de México. Homenaje a Eduardo Matos Moctezuma*. Editado por Leonardo López Luján, David Carrasco, y Lourdes Cué. pp. 131-151. Instituto Nacional de Antropología e Historia. México.

Sugiyama, Saburo, Rubén Cabrera y Leonardo López Luján

2004 Los entierros dentro de la Pirámide de la Luna. *Viaje al centro de la Pirámide de la Luna. Recientes descubrimientos en Teotihuacán*. pp. 20-30, 43-58. Arizona State University; Aichi Prefectural University; Japan Society for Promotion of Science; National Geographic Society; CONACULTA-INAH. México.

千葉裕太

2015 「植民地期初期メキシコ中央高原の史料に見る黒曜石の呪医的利用—物質化された治癒神の特性—」、『物質文化』、物質文化研究会、95号、pp.135-151。

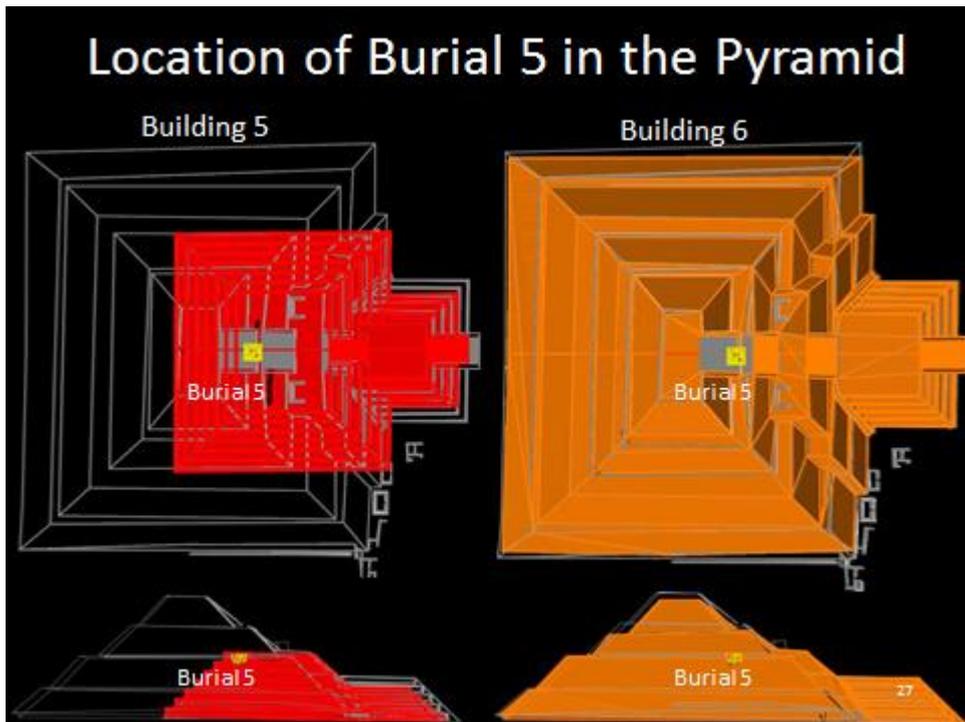


図1 埋葬墓5、位置 (© PPL)

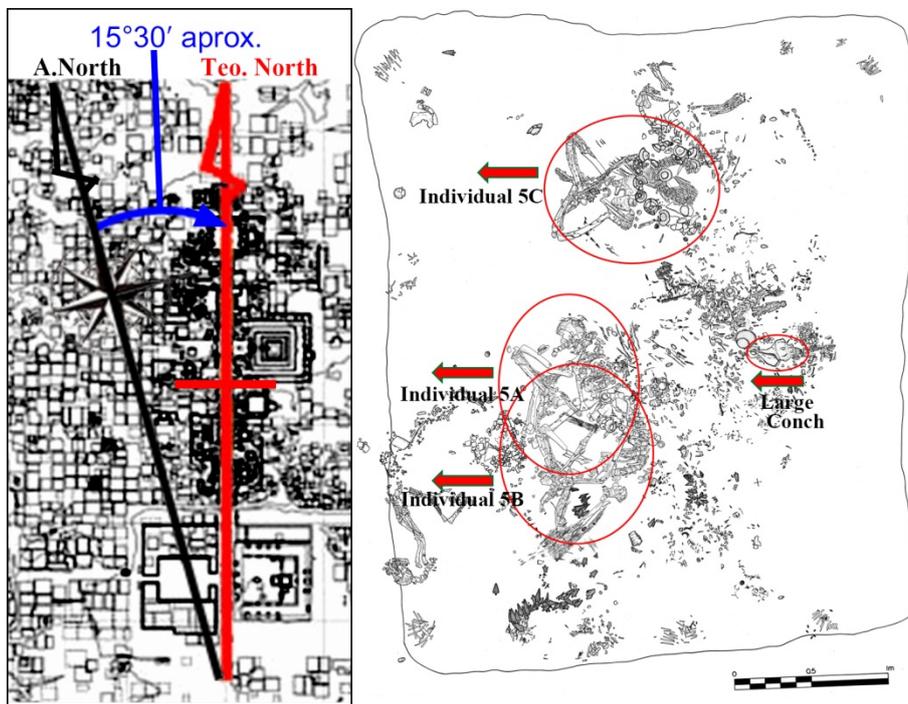


図2 (左) テオティワカンの建築軸と天体の方位軸(Millon 1973 より、報告者編). (右) 埋葬墓5内、建築軸の西方を向く埋葬体と副葬品

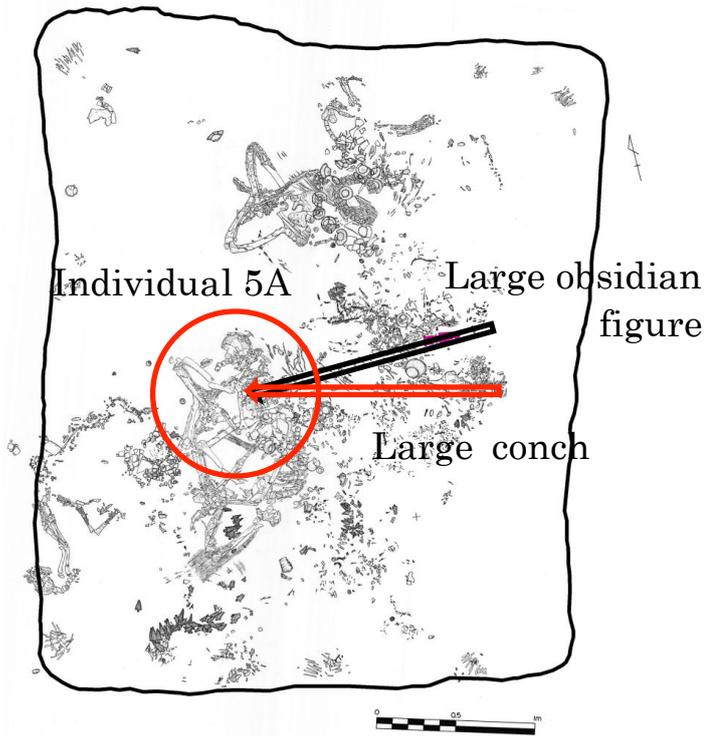


図 3 (左) テオティワカンの建築軸と天体の方位軸(Millon 1973、報告者編).
 (右) 埋葬墓 5 の中心となる埋葬体 5A とワシの位置

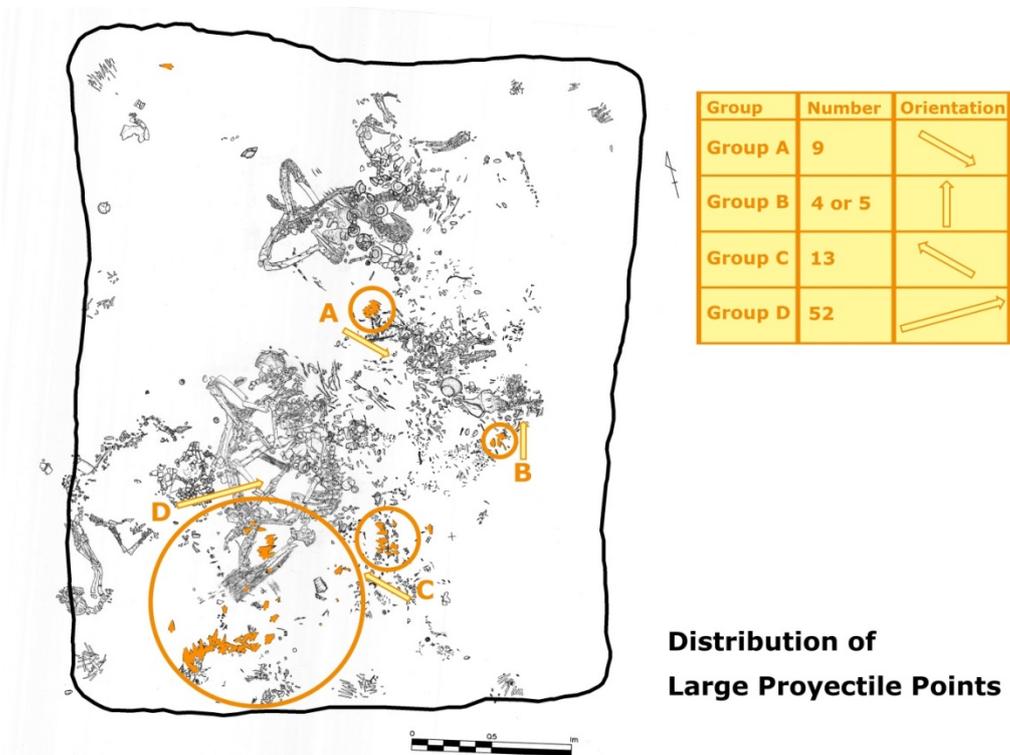


図 4 (左) 石鏃群の配置. (右) 各石鏃群の個体数

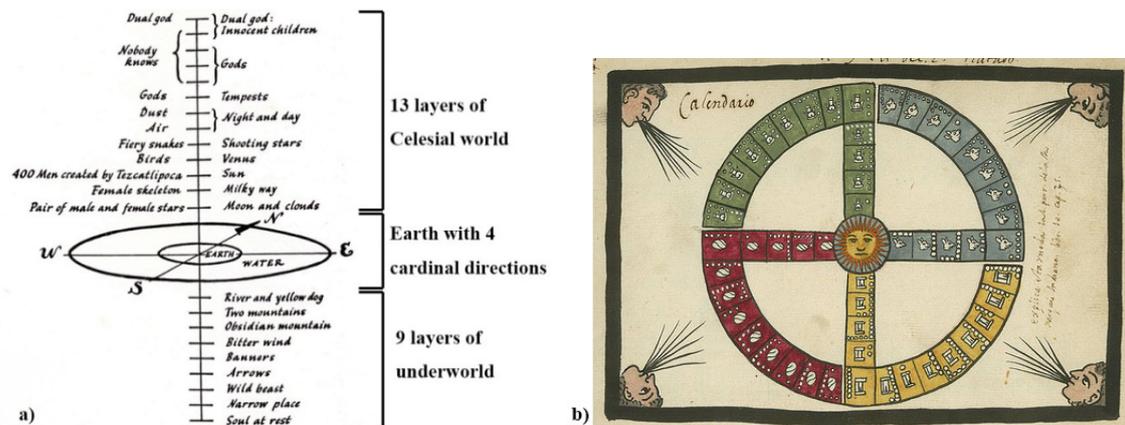


図5 (a) ナワの宇宙観モデル(Abel Mendoza 作図, Nicholson (1959)より、報告者抜粋)、(b)52年周期の暦, Kubler and Gibson (1951)より転載

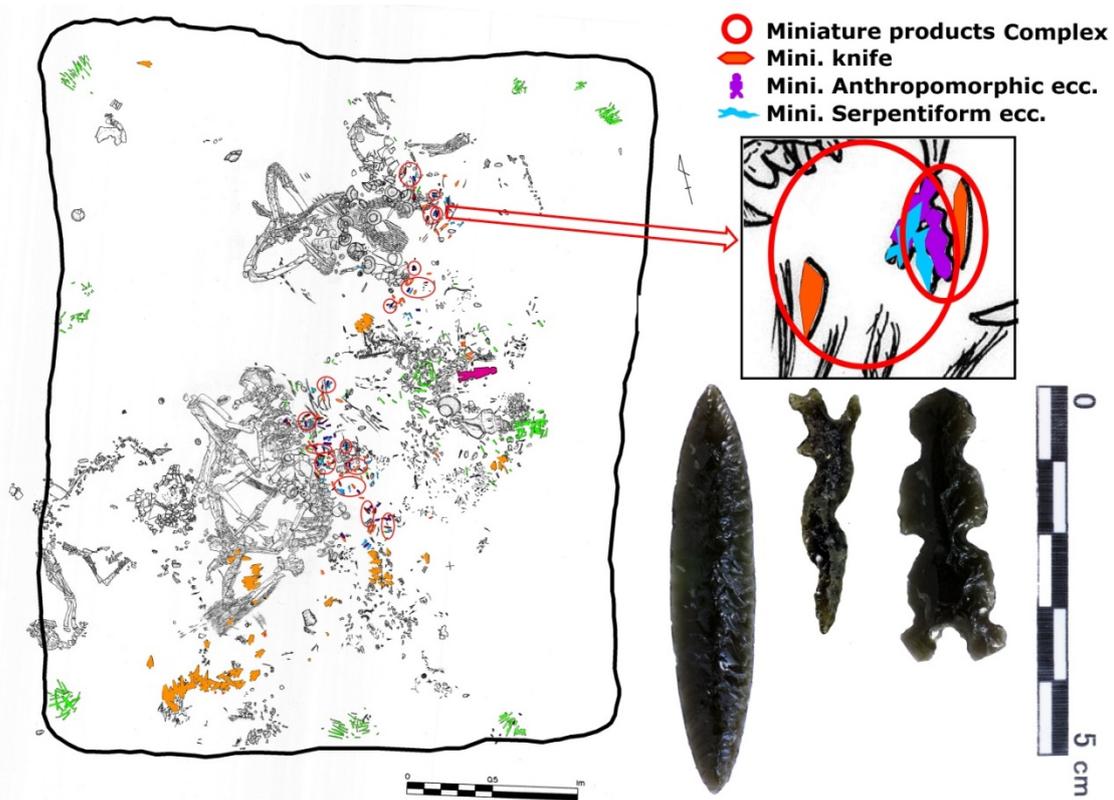


図6 埋葬墓5内ミニチュア製品、人型エキセントリック石器・蛇形エキセントリック石器・ナイフを1セットとする



図7 「羽毛の生えた蛇」の意匠（左）大型製品.（右）ミニチュア製品

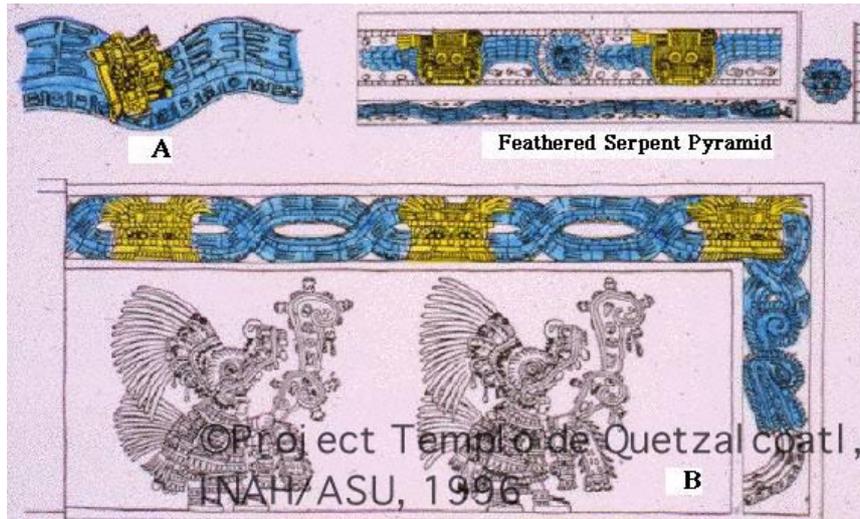


図8 壁画。「羽毛の生えた蛇」が権力の象徴として冠を運ぶ（© PTQ, INAH/ASU, 1996）



図9 （左）灰色黒曜石：両面加工器に加工される傾向.（右）緑色黒曜石：石刃製作に適し、石刃からミニチュア製品が再加工される

パコパンパ遺跡における威信財の儀礼的製作と廃棄に関する一考察

荒田 恵
国立民族学博物館 外来研究員
関西大学 非常勤講師

キーワード：儀礼、製作、廃棄、エリート、コントロール

1. はじめに

パコパンパ遺跡から出土した石器、骨角貝器、土製品および金属器の分析で、同遺跡において、装身具および儀礼の際に用いる道具などの威信財の製作が行われていたことが明らかになった。さらに近年の調査で、これら威信財は、それらの廃棄を視野に入れ、儀礼などで使用することを目的として製作されていたという見通しが得られつつある。

威信財の廃棄に関しては、すでに他の遺跡でも報告例があり、饗宴儀礼との関連性が指摘されている。さらに、饗宴儀礼にともなって廃棄されたもののなかには、儀礼の際に用いられたと思われる道具の未製品が含まれる場合もあることから、近年では製作の段階から儀礼的であったという解釈がなされている。

そこで本発表では、パコパンパ遺跡から出土した資料の分析をもとに、同遺跡における威信財の製作から廃棄までの一連の行為が儀礼的であったかどうかを、エリート層によるコントロールとの関係性を考慮しながら考察する。

2. パコパンパ遺跡における威信財の廃棄行為

近年、行動考古学において儀礼行為に関する研究が活発に行われるようになってきている (Fogelin 2007:61-62)。ウィリアム・ウォーカー(William H. Walker)は、廃棄コンテクストについて、(1)クラトファノス廃棄(Kratophanous deposit)、(2)犠牲的廃棄(Sacrificial deposit)、(3)儀礼的廃棄(Ceremonial trash deposit)の三種類の類型を想定している (松本 2013:5; McNiven 2013:558; Walker 1995:75-77)。実際の考古学的コンテクストにおいて、この3種類の境界は曖昧であるという指摘もあるが (McNiven 2013:559)、パコパンパ遺跡では、パコパンパII期 (紀元前 800 年頃から紀元前 500 年頃) 以降、(2)犠牲的廃棄と(3)儀礼的廃棄の二つの廃棄行為が確認できる。前者には中央基壇東側パティオにおける Pago に伴う埋納行為が、後者には北基壇半地下式方形パティオにおける廃棄行為が対応する。しかし、半地下式方形

広場の封印過程における廃棄行為は、犠牲的廃棄と儀礼的廃棄の二つの要素を併せ持つと言える。そこで、パコパンパ遺跡における三つの廃棄行為について述べ、これらを比較してその多様性の成因について考える。

2-1. 犠牲的廃棄 —中央基壇東側パティオにおける Pago に伴う埋納行為—

犠牲的廃棄(Sacrificial deposit)は、その時点で引き続き使用可能、あるいは生存可能なモノを各々の脈絡から引き離し、直接的に考古学的なコンテクストに変換する行為として定義される。この場合、本来使用可能だった残りの期間が、概念的に儀礼の脈絡で生かされることになる。奉納供物や埋納遺構などがこれに対応する(松本 2013:5; McNiven 2013:558; Walker 1995:76)。

パコパンパ遺跡で、この犠牲的廃棄に該当するのは、中央基壇の東に位置するパティオ(図1)周辺で確認された、pago に伴う埋納遺構群である。この遺構群は中央基壇とパティオの間に位置し、形成期後期に対応するパコパンパ II 期後半(PCIIB 期)に相当する。とりわけ興味深いのは C-Hoyo09-27 の資料で、パイプ形骨角器、スプーン形骨角器および骨製管といった、幻覚剤を吸引する際に用いられたと想定される骨角器と一緒に出土している。また、C-Hoyo09-29 からは、精製のヘラ形骨角器、粗製の骨製錐とともに、刻線で頭部に装飾が施された骨製の刺突具と推定される骨角器が出土する。前者は儀礼の際に用いられた幻覚剤の吸引具(スナッフイング用具)、後者は製作道具であると考えられ、このような道具類が威信財として、あるいは威信財とともに埋納されていることが特徴の一つとして挙げられる。

この犠牲的廃棄が行われたパコパンパ II 期には、別の空間で異なる廃棄行為が行われていた。それが次に述べる、北基壇の半地下式方形パティオ(図1)における廃棄行為である。

2-2. 儀礼的廃棄 —北基壇半地下式方形パティオにおける廃棄行為—

北基壇の半地下式方形パティオにおける、饗宴儀礼に伴う廃棄行為は、儀礼的廃棄に該当すると言える。儀礼的廃棄(Ceremonial trash deposit)は、超自然的な、あるいは宗教的な力を充填されたモノが、その本来の役割を果たさないようになった後、特定の廃棄の手続きが必要とされる状態で現れる。この場合、その本来の機能が停止していたとしても、廃棄の対象となるモノは力を有しており、日常のコンテクストに戻すことが危険であったり、聖性を汚すことになったりすると考えられるためである。使い古された儀礼具の廃棄、儀礼的な饗宴が行われた後の廃棄などがこれに対応している(松本 2013:5; McNiven 2013:558; Walker 1995:76-77)。

これまでの発掘調査および土器・動物骨の分析から、このパティオでパコパンパ II 期前半(PCIIA 期)から後半(PCIIB 期)にかけて饗宴儀礼が行われたことが明らかにされている。

饗宴儀礼に伴う廃棄行為については、同時期の他遺跡でも報告されている。例えば、ア

ヤクーチョ県に位置するカンパナユック・ルミ遺跡（図2）では、大量の動物骨と炭化物が付着した土器片とともに、幻覚剤の吸引に用いられたと考えられる骨角器、黒曜石製尖頭器や蛇の頭を象った金製品の破片が出土している（松本 2013：9-10）。パコパンパ遺跡の場合、饗宴儀礼の資料と直接共伴して出土している資料に、幻覚剤の吸引に用いられたと考えられる骨角器が含まれるものの、わずか1点だけであり、尖頭器や金製品の破片も出土しない。しかし、パティオ全体に範囲を広げて、饗宴儀礼が行われた時期に相当する層から出土したすべての遺物を対象とすると、幻覚剤の吸引に用いられたと考えられる骨角器やその未製品が含まれることが分かった。

一方、尖頭器や金製品については、パティオ全体に範囲を広げても、これらが出土していることは確認できなかった。しかし、このパティオの南側に位置する半地下式方形広場では、その封印過程に伴って尖頭器や金製品が廃棄されたことが明らかにされており、これらについては半地下式方形広場における廃棄行為として述べる。

幻覚剤の吸引具などの威信財のほかに、銅製あるいは骨製の針、紡錘車が北基壇のパティオから多く出土していることが分かった。さらに、金属製錬用の坩堝や金属加工に用いられたと推定される金属器が、このパティオに集中的に廃棄されたことも明らかになった。これらの資料は饗宴儀礼のコンテクストからも出土していることから、饗宴儀礼に伴って廃棄されたことは明白である。紡織具および坩堝や金属加工用の金属器などの、製作道具の廃棄については、松本が指摘する儀礼的製作（松本 2015：200-201）を検討する必要がある。この点については、後の「3. パコパンパ遺跡における儀礼的製作」で検証する。

このように、北基壇半地下式方形パティオにおける儀礼的廃棄の特徴は、饗宴儀礼に伴って威信財と製作道具が廃棄されることである。中央基壇東側パティオの犠牲的廃棄よりも複雑な様相を呈するため、より詳細な分析を行う必要がある。

2-3. 半地下式方形広場の封印過程における廃棄行為

2014年までの発掘調査によって、半地下式方形広場が封印されたのは、形成期後期に対応するパコパンパⅡ期ではなく、カハマルカ前期（紀元後200年頃から紀元後450年頃）であったと考えられている。半地下式方形広場の封印過程については、4つの大きなイベントが確認されており、それぞれに対応して、石製玉製品およびその未製品、尖頭器、金箔片、坩堝、骨角製品の未製品などが廃棄される。最初に、半地下式方形広場を儀礼的に埋めるイベントに伴って廃棄されるもののなかで、最も出土量が多く特徴的なのは、石製玉製品とその未製品である。特に、様々な工程に対応する石製玉製品の未製品の分析で、その製作工程を推定復元することができた。このように、各工程に対応する石製玉製品が意図的に廃棄されていることは、半地下式方形広場で儀礼的な製作が行われたと解釈することができる。

また、尖頭器については、パコパンパ遺跡から出土する尖頭器の多くが、半地下式方形広場に集中することが挙げられるほか、4つのイベントのうちの2つのイベントに伴って廃

棄されることが分かっている。

半地下式方形広場から出土する尖頭器は、破損しているものもあるが、その多くが完形で、肉眼観察で使用痕が確認できるものはない。チャビン・デ・ワントル遺跡の石彫には投槍器をもった戦士が描かれている（Rowe 1967:103 fig.20; Rick 2008:21 fig.1.15; Roe 2008:209 fig.7.11）が、松本が指摘するように、使用痕のみられない尖頭器は、狩猟あるいは戦争が儀礼として行われていたことを示唆しているのかもしれない（Matsumoto 2012:756）。

このように、半地下式方形広場の封印過程では、状況に応じて異なる儀礼が行われ、その際用いられた道具あるいは、その過程でできた製品および未製品などすべてがその場に廃棄されるという特徴がみられる。

2-4. 廃棄行為の多様性に関する考察

上記の三つの廃棄行為は三者三様で、この違いを生む要因として、儀礼の秘儀性と公共性および経時的变化などが考えられる。

松本は、祭祀遺跡における廃棄行為の儀礼的側面に注目する場合、公共的な行為（儀礼）と、エリート層に限定された行為（儀礼）という二つの可能性について考慮しなければならない（Matsumoto 2012:755）、と指摘する。パティオと半地下式方形広場の空間配置から、中央基壇東側パティオ周辺の Pago に伴う埋納行為と北基壇半地下式方形パティオにおける廃棄行為はエリート層による廃棄行為として、半地下式方形広場の封印過程における廃棄行為は公共的なものであった可能性が考えられる。

北基壇の半地下式方形パティオについては、その周囲に金製品が副葬されるようなエリート層の墓が配置されることなどから、エリート層に限定された空間であったと考えられる。

また、中央基壇東側パティオについては、半地下式方形広場から直接アクセスすることができるが、背後には、金製耳飾りや大量の貝製玉製品が副葬された貴婦人の墓をとまなう中央基壇が控える。貴婦人の墓は、半地下式方形広場と中央基壇を結ぶ中心軸上に配置され、埋葬場所、埋葬方法、副葬品の量、質のいずれについても、パコパンパ遺跡で最も傑出した墓である。この中央基壇の東側に位置するパティオは、中央基壇に付随していることから、エリート層のなかでもより限られた集団のための空間だったと推定される。

一方、半地下式方形広場については、第三基壇上のアクセスの結節点にあたる中央に位置することから、三者のなかでは最も公共的な空間であったと考えられる。そのため、ここで行われた廃棄行為はより公共的な性格をもっていたと推測される。

しかしながら、現段階では、両パティオと半地下式方形広場に廃棄された資料をもとに、廃棄行為の秘儀性と公共性を論じるのは困難であり、廃棄行為の多様性の要因の特定については、今後の課題として残る。

3. パコパンパ遺跡における儀礼的製作

パコパンパ遺跡から出土した資料の分析を行った結果、一連の製作工程が推定復元できる未製品と製品（道具）が、限定された区画からそろって一定量出土する場合、それらが儀礼的に製作されたと定義できると考えた。パコパンパ遺跡では、この条件に当てはまる事例が2つある。1つ目は先述した、半地下式方形広場の封印過程に伴う石製玉製品の製作、2つ目は円形構造物における製作道具の埋納で、双方ともカハマルカ期に相当する。

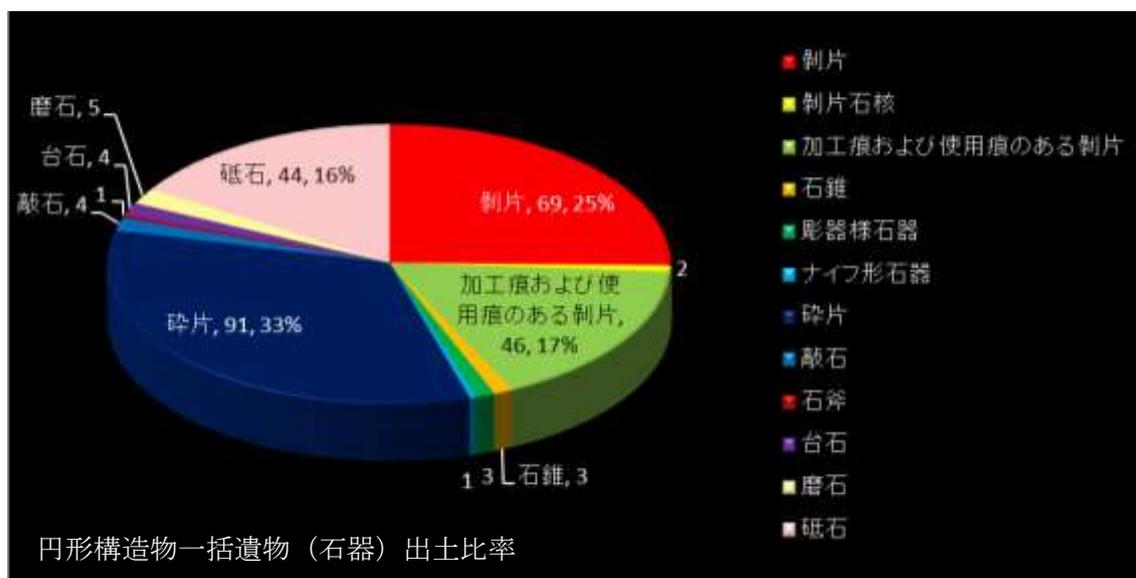
3-1. 半地下式方形広場の封印過程に伴う石製玉製品の製作

半地下式方形広場の封印過程で確認された、4つの大きなイベントのうち、2番目のイベントの際に、石製玉製品の儀礼的製作が行われた。さまざまな供物の奉納と広場を埋める行為が開始された、2番目のイベントに対応する層位からは、石製玉製品とその未製品のほかに、尖頭器、金製装飾品、銅製の大型の針などが出土している。

2013年の発掘調査では、345点の石製玉製品と未製品がこの層位から出土しており、そのうち246点が製品で、99点が未製品であった。また、これらが半地下式方形広場の中心部分から集中して出土することも明らかになった。このように、限られた区画から大量の製品と各製作工程に対応する未製品がそろって出土することから、半地下式方形広場の中心部で、石製玉製品の儀礼的製作が行われたと解釈できる。

3-2. 円形構造物における製作道具の埋納 — 犠牲的廃棄 —

パコパンパ遺跡第3期壇上の西端に位置する、円形構造物の頂上につくられた部屋状構造物から、12タイプの石器が合計275点一括して出土した。12タイプのなかで最も出土量が多かったのは破片で、この一括遺物の3割以上を占める。破片として分類したものは、剥片剥離作業の際に生じた石片で、打点、打瘤（バルブ）などが確認できないもの、あるいは打点および打瘤などが確認できない剥片石器の破片である。破片に次いで出土量が多



かったのは剥片で、全体の 4 分の 1 を占める。打製石器の製作を裏付ける剥片と碎片の出土比率が高い点に加え、出土した剥片を接合することができたことは、部屋状構造物で打製石器の儀礼的製作が行われていたことを示唆していると言える。

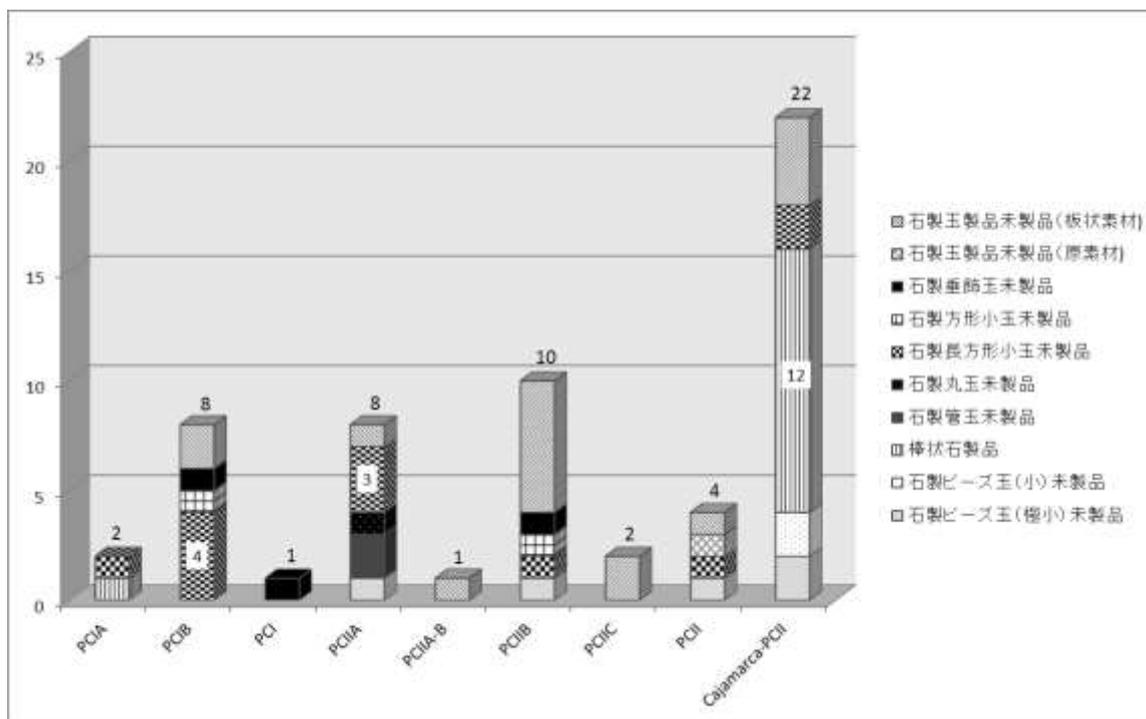
また、この資料の特徴として、砥石の出土比率が高いことが挙げられるが、どのような製品をつくるために砥石を用いたかは不明である。磨石や敲石などについてもその用途を特定することはできないが、これらは何らかの製作活動を行う際に利用された可能性は高い。

このように、円形構造物の部屋状構造物から出土した一括遺物には、製作道具や打製石器の儀礼的製作を示唆する石器が含まれる。したがって、この資料については、打製石器の儀礼的製作が行われた後で、いくつかの製作道具を加えて犠牲的廃棄を行っていると思われることができる。

3-3. パコパンパ遺跡における工芸品製作の変質 — 形成期中期・後期とカハマルカ期 —

上述したように、カハマルカ期には石製玉製品および打製石器の儀礼的製作が行われていた見通しが得られつつある。しかし、それ以前の形成期においては、カハマルカ期にみられるような事例はまだ確認されていない。

そこで、形成期における儀礼的製作の有無を検証するために、カハマルカ期に儀礼的製作が行われた石製玉製品の製作について、未製品に注目して通時的变化を確認した。その結果、カハマルカ期に未製品の出土量が飛躍的に増加することが分かり、カハマルカ期における石製玉製品の儀礼的製作をさらに補強することになった。



石製玉製品未製品出土推移

別の角度から、形成期における儀礼的製作を検証するために、饗宴儀礼に伴って廃棄された、北基壇の半地下式方形パティオの資料を分析した。この資料には合計 20 点の石製玉製品およびその未製品が含まれ、そのうちの 13 点が未製品であったが、半地下式方形広場から出土するような、切断線あるいは切断痕が残るような資料は確認できなかった。

これらのことから、石製玉製品の製作については、形成期には儀礼的製作は行われなかったと考えられる。

それでは、饗宴儀礼に伴って廃棄された針や紡錘車などの紡織具や金属製錬用の坩堝および金属加工用の金属器についてはどうだろうか。

饗宴儀礼のコンテキストからは、土製紡錘車が 22 点、石製紡錘車が 1 点、銅製針が 11 点、骨製針が 1 点出土する。これらの紡織具が饗宴儀礼に伴って廃棄されたことは明白であるが、儀礼的に紡織が行われたことを立証するのは困難である。

一方、金属製錬用の坩堝および金属加工用の金属器は、パコパンパ遺跡において冶金が行われていたことを裏付ける資料であり、これらが北基壇のパティオから集中して出土することは大変興味深い。饗宴儀礼のコンテキストからは坩堝が 3 点、金属加工用の金属器が 1 点出土するが、出土量はそれほど多くない。冶金における未製品のひとつとして粗銅が挙げられるが、饗宴儀礼には伴わないパティオ内の上層から出土する。これらのことから、紡織具と同様に、儀礼的に冶金が行われたことを立証することは難しい。

このように、現段階では、形成期に儀礼的製作が行われたことを立証するのは困難である。これらのことを総合して考えると、形成期に行われていた工芸品製作が、カハマルカ期に儀礼的製作を帯びるようになったと解釈する方が妥当であると思われる。

4. 考察と今後の展望

これまでの分析で、エリート層の墓から生産活動を示唆するような副葬品が出土していることが確認されている。具体的には、石製および貝製玉製品などの装身具とともに紡織具が副葬される場合、あるいは製作道具と未製品と一緒に副葬される場合などがある。これらのことから、エリート層が生産活動に携わっていたと推測することができる。しかし、製作址が特定されていないことなどから、エリート層による生産活動のコントロールを立証することは現段階では難しい。

そこで、別の角度からエリート層のコントロールを検証するために、これまで述べてきた廃棄行為と儀礼的製作について、コントロールの有無を考察した。

幻覚剤の吸引具などの威信財の廃棄については、中央基壇東側パティオの **Pago** に伴う埋納行為は、遺跡内の主要な建築に付随する空間に意図的に埋納されていることから、エリート層によるコントロールがあったと解釈することができる。しかし、北基壇の半地下式方形パティオにおける儀礼的廃棄については、威信財はパティオに限定されずに、北基壇全体に散在するため、エリート層によってコントロールされていたとは言えない。饗宴儀礼に伴う廃棄行為に対するエリート層のコントロールの存在を証明しているのは、むしろ、

金属製錬用の坩堝および金属加工用の金属器である。この点に関しては、紡織具のデータを含め、より詳細な分析を行って、このような製作道具がこのパティオに集中的に廃棄された要因を検証しなければならない。

一方、儀礼的製作については、その担い手、あるいはコントロールしていた行為者を特定することは困難であるが、限定された空間から製品と各製作工程に対応する未製品が一緒に出土することなどから、コントロールされていた可能性が高い。

上述したように、北基壇の半地下式方形パティオにおける儀礼的廃棄については、特に複雑な様相を呈しているため、今後の詳細な分析が必要である。

参考文献

Fogelin, Lars

2007 The archaeology of religious ritual. *Annual Review of Anthropology* 36:55-71

Matsumoto, Yuichi

2012 Recognising ritual: the case of Campanayug Rumi. *Antiquity* 86: 746-759.

松本雄一

2013 「神殿における儀礼と廃棄 —中央アンデス形成期の事例から—」『年報人類学研究』3: 1-41。

2015 「神殿・儀礼・廃棄 聖なるモノとゴミとの間」『朝日選書 935 古代アンデス文明と西アジア 神殿と権力の生成』朝日新聞出版 pp.167-208。

McNiven, Ian J.

2013 Ritualized maddening practice. *Journal of Archaeological Method and Theory* 20:552-587.

Rick, John W.

2008 Context, construction, and ritual in the development of authority at Chavín de Huántar, in W. Conklin & J. Quilter (ed.) *Chavín : art, architecture and culture* (Cotsen institute Monograph 61): 3-34. Los Angeles (CA): Cotsen Institute of Archaeology, University of California.

Roe, Peter G.

2008 How to build a raptor: why the Dumbarton Oaks “scaled cayman” Callango textile is really a jaguaroid harpy eagle, in W. Conklin & J. Quilter (ed.) *Chavín : art, architecture and culture* (Cotsen institute Monograph 61): 3-34. Los Angeles (CA): Cotsen Institute of Archaeology, University of California.

Rowe, Jhon H.

1967 Form and meaning in Chavín art, in J.H. Rowe & D. Menzel (ed.) *Peruvian archaeology:* 72-103. Palo Alto(CA): Peek Publications.

Walker, William H.

1995 Ceremonial trash? In Skibo, J. M., W. H. Walker, and A. E. Nielsen (eds.), *Expanding*

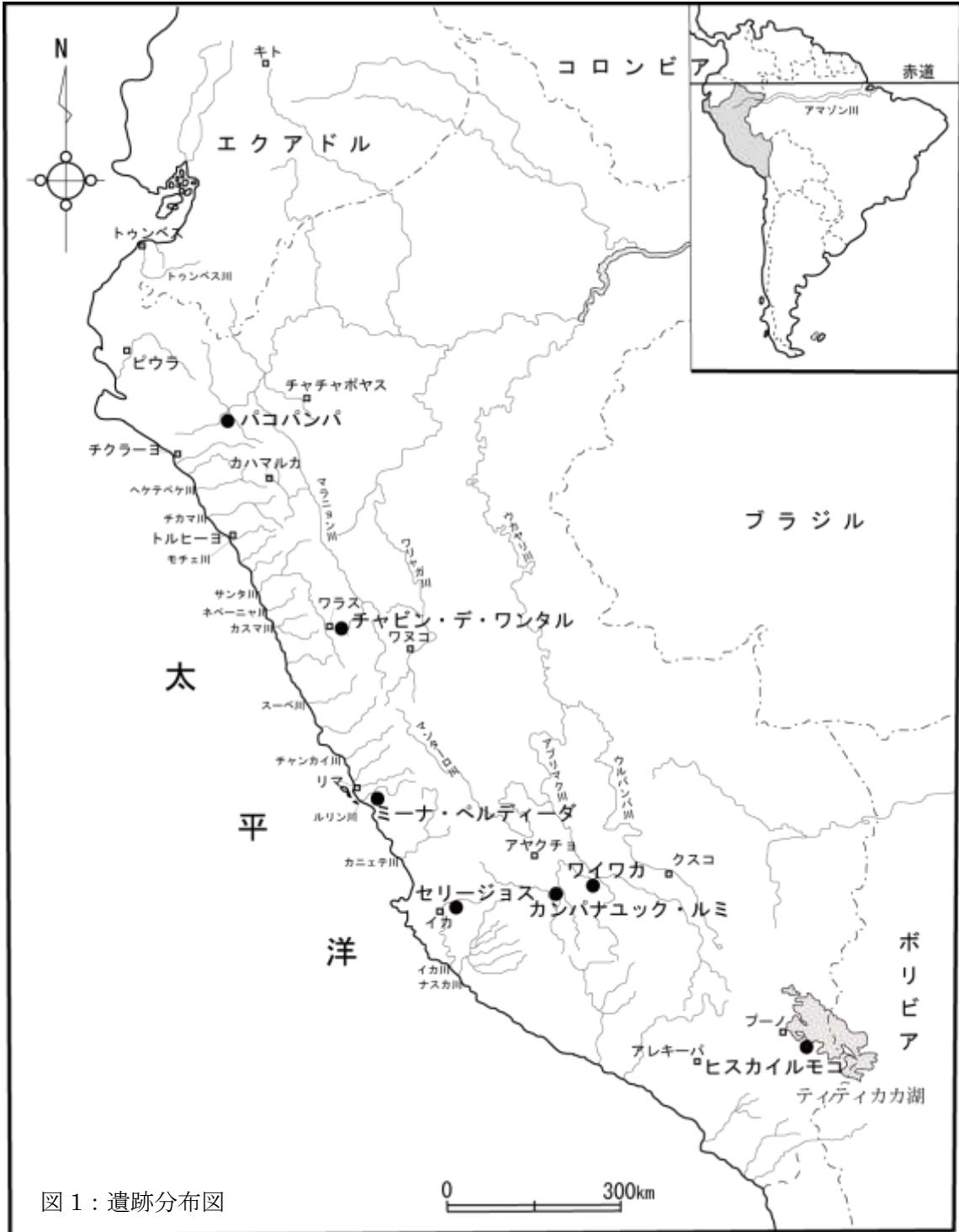


図 1 : 遺跡分布図

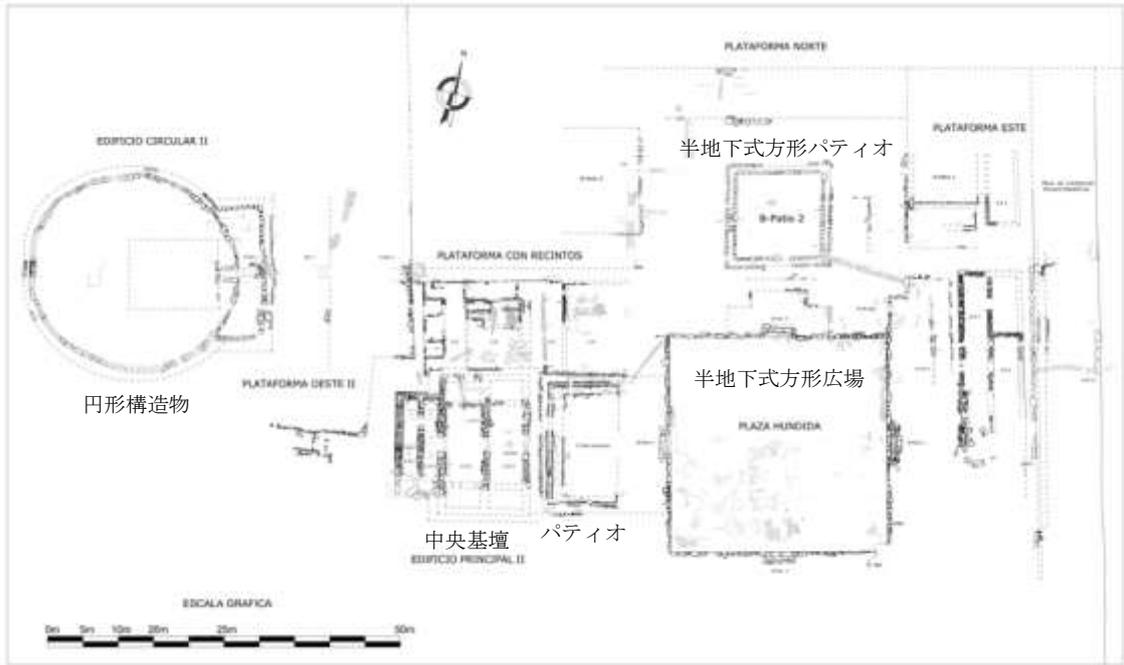


図 2 : パコパンパ遺跡第 3 基壇平面図 (PCII 期)